

創作の意図・目的 『血のいろの降る雪 木原孝一アンソロジー』（二〇一七年、未知谷）編集に見つかった、木原孝一の遺品の手帳には、「存在しない、神。」と書かれていた。「存在しない」と「神」のあいだに、何かを書き加えようとした痕跡があったが、読み取れなかった。敗戦トラウマに苛まれる木原は、神の不在を痛切に感じ、なお「神」を求めてやまなかった。

木原をはじめとする荒地派の詩人たちは、生涯を賭けて「存在しない、神」を追求した。本作は荒地派と、彼らに決定的影響をあたえた森川義信・牧野虚太郎らの「神」のイメージを受け継ぎつつ、二十一世紀の「神」を描いたものである。

## 神の歌

山下 洪文

静けさの咲き乱れる森で  
あなたの唇の  
沈黙にふれる  
煉獄のような  
ゆうやけが  
僕の指のあいだから滴り  
揺れる草花を  
血のいろにそめてゆく  
あなたは  
ほそい雨となり  
穢れた地上を

洗い流した  
傷ついたつまさきで  
あなたはゆっくりと  
世界よりもおおきな  
しるしを書いてゆく  
もりのかげで  
まだちいさな  
ぼくがきいた  
これはなあに？

万年筆の滴りに  
うつくしく

こわれたものたちが  
宿っている

レモン水のような

夕波が

僕たちを襲い

古い机に

藍いろの傷が残る

その跡をなぞりながら

僕は耳をすましていた

いまここに神はいない

あなたの声の 波間を

黒い花束が漂ってゆく

いつの日か

あなたの

口から溢れ出した

花々は

地上を覆い

僕はそれを

両手ですくって

のむだろう

そして

僕は

嵐の子を孕む

窓辺には 夕焼けが

幾世紀も

溜まりつづけ

あなたが窓をあけると

ひかりは

蛍のように迷っていった

やがて

僕たちの口はかがやき

優しい歌を

くちずさんだ

丘上の兄妹のように

僕たちは

涼しい風に吹かれ

汗ばんだ手を絡ませ

けんめいに

二十世紀の狂気を讃えた

遺跡のような

静けさのなかで

黒い花びらのような

軍服をまとい

いつわられた

歴史を

犯す

皮膚を割いて

ひかりをこえて  
ほんとうの  
時間にふれたかった  
翼をもがれた言葉を  
だきしめて  
言ってごらん  
そこに僕たちの遺産があると  
一段しかない  
階段に立って  
奈落をのぞむ  
狼のような  
海鳴りのなかで  
禁じられたしるしを  
風に刻んだ  
からすの羽のような  
島を  
あなたの面影を宿す  
水が  
貫いてゆく  
みずいろの小舟に乗って  
僕は  
言葉を探しに出かけた  
あなたの指先に紡がれる

藍色の城  
降ることのなかった雪のなかに  
埋もれてゆく  
僕たちの  
月のような瞳にうつるのは  
抱えきれないほどの  
夢と戦争  
あなたの唇に宿る  
うつくしい静けさのなかで  
僕は一人だと言った  
傷ついた扉のむこうに  
ほっそりとした光が立っていて  
胸のあたりに指をふれると  
僕は水底で母に抱かれています  
残されたあなたは  
机に落ちていた  
ひとひらの静寂に 片耳をあてて  
窓辺に座る まだちいさな  
あなたの声を聞いていた  
二人は枢軸を失い  
血を流すひとは  
底深く黙っていた  
傷ひとつない空のしたに

あなたの血溜まりがひろがってゆく  
初めて見る歴史の面ざしに

くちづけると

世界はいつしか遺跡となり

僕たちしかない言葉のなかを

ときおり

桜の花びらがかすめてゆく

そのまま

幾世紀も

僕たちは歩みつづけた

ごらん

言葉はまだ残っている

そのために 僕は殺さねばならなかった

そのために 僕は生きねばならなかった

僕たちが美しい傷痕であるために

地上は黙せ

みずいろの拳銃を手に

偽りの夕焼けを殺す者らを赦せ

雪のように降り積もる

光の死骸は

あらゆるあなたの枢軸となり

乳母車のように

僕たちを

僕たちへとつれだすだろう

あなたの唇に宿る  
誰もいない海に

言葉を流した

いつの日か

もう一度

世界が

あなたと

僕の静けさ

の間に生れて

本当の夕焼けを

地上に零すだろう